OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語時間表現の体系性と制約
Author(s)	伊藤, 創
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54328
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【15】

氏名	伊藤（い とう）　創（はじめ）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２３９０２　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	日本語時間表現における体系性と制約
論文審査委員	(主査) 教　授　春木　仁孝 (副査) 教　授　杉本　孝司　　准教授　井元　秀剛

論文内容の要旨

本研究では、日本語の空間表現が時間表現として用いられる場合の様々な制約について考察を行った。≪空間≫と≪時間≫の間に対応関係があることは明らかであり、だからこそ≪空間≫の概念を表す表現が、≪時間≫の概念を表すことができるわけであるが、前者に属する概念の全てが後者のそれと対応づけられているわけではない(＝写像の抜け)。その結果、空間表現と時間表現の間には不均衡が生じることになる。

この現象は、これまで、主に不変化原理と呼ばれる写像を制限するメカニズムを想定することによって説明されてきた。≪時間≫はそれ独自の内在的構造を持ち、したがって両概念領域の対応付けは部分的にしか行われないというのである。しかし本研究では、こうした先行研究による写像の部分性への説明は不十分である事を指摘し、それを補うための説明試案を提示した。

まず、不変化原理は、特定の写像(特定の概念間の対応付け)そのものを妨げるものなのか、写像が行われる際に根源領域の概念を目標領域の構造に合うように変化させるものなのか定義が曖昧である。これはもちろん、定義だけの問題ではなくて、実際に不変化原理という概念上でのシステムが実在するならば、それがどのように働くのかが明らかではないということである。不変化原理というシステムがそもそも存在するのか、そうであれば、≪時間≫独自の内在的構造は存在するのか、それはどこから生じるものなのか、こうした点を明らかにする必要がある。更に、過去に時間的意味を実現したが、現在ではその意味を消失したものなどが存在することを指摘し、これらについては、不変化原理では説明がつかないため、こうした表現に関しては≪時間≫独自の構造による写像の制限とはまた異なった方向から説明が必要であること、また明らかに空間概念を用いて時間を概念化していると思われる場合でも、空間表現と時間表現の間に振る舞いの相違が見られることなども同時に説明がつかない。

本研究では、こうした点に関して、空間表現が時間的意味を持つようになる過程をいくつかの段階に分けて考察し、これまでの分析を補うことを試みた。まず≪空間≫の概念と≪時間≫概念が、概念上で対応関係を持つようになる段階については、こうした写像の単位が状況であると想定することが必要であることを主張した（＝状況基盤の時間メタファー）。我々が事態を理解する単位は状況という単位であり、特定の状況が≪時間≫という概念領域を構造化するためのモデルとなる。こうした状況は時間的な概念を喚起させるような個々の状況であり、本稿ではこれを根源状況と呼んだ。こうした根源状況で用いられる空間表現が、時間的意味を確立する可能性を秘めた表現であり、逆に言えば、こうした状況で用いられないような空間表現は、(この段階では)時間的意味を持ち得ない。このような限定を加える事によって、≪空間≫と≪時間≫の写像の部分性の一部に説明を与える事が出来る。本稿ではMoving-TimeやMoving-Egoといった、これまで≪時間≫の構造を捉えるモデルとして提示され

てきたものを、更にこうした状況別に細分化し、モデルの再分類、下位分類を行った。この下位分類された単位でこそ、≪空間≫と≪時間≫の写像が行われていると考えるからである。

この概念上での対応関係の段階では、時間概念は、≪空間≫の概念以外によっても形成される。しかし基本的に、他の概念領域によって概念化された時間の特性であっても、それらはできる限り保持されるという想定も行った。本稿では、これこそが、従来、不変化原理において想定されてきた時間領域の内在的構造の内実だと考える。

こうした≪空間≫の概念と≪時間≫の概念が対応づけられる写像の段階についての考察の次に、写像によって生じた対応関係を利用して、根源領域の概念を目標領域に持ち込む投射の段階についても分析を行った。一旦、写像関係が成立してしまえば、潜在的にはあらゆる根源領域の概念が目標領域へと投射可能になる。だからこそ、類義、対義関係を通じて、連鎖的に根源領域の表現が次々に目標領域へと持ち込まれることになる。このようにして増加した類義表現は、その後、類義語間の競合という形で、その意味を消失、あるいは互いに棲み分けを確立していく。

この様に、投射の段階では潜在的にあらゆる空間表現が時間的意味を持ちうる。ただし、対応づけられるであろう目標領域の概念を表す言語表現には、その目標領域の意味の実現を妨げる様々な意味特徴が存在し、これらが制約として働くために、≪空間≫と≪時間≫の表現の間に不均衡が生じる可能性もある(こうした制約によって生じた不均衡は、概念上では対応関係がある故、不変化原理では扱えないものである)。本稿ではこのような可能性に鑑み、メタファー的意味の実現を妨げる表現側の要因の一部を解明することも試みた。

概念メタファーに関しては、言語表現の在り方の分析から概念構造の在り方をひも解くという方向性の研究が数多く存在するが、実際に、概念が言語表現として具現化する際には様々な要素が絡んでくる。ある概念が異なる別の領域の概念と対応関係をむすんでいたとしても、それが、特定の言語においては慣習化されていない表現の型であったり、通時的に他の表現がその概念を表すために確立していたり、様々な要因で、その実現が成立しない場合があるのである。本稿も、もちろん、概念構造の在り方を分析することが目的の一つであり、概念の在り方としてメタファーの成立のレベルが状況である事を提示するものであるが、同時に、概念と言語表現の間に存在する不確定要素を考察し、その不均衡の解明の要因の一部を明らかにするものである。

論文審査の結果の要旨

本博士論文は、認知言語学の枠組みにおいてその研究が大きく発展している概念メタファーに関して、特に時間の領域における事を表すために空間領域の表現が用いられるという現象を対象として、これまでの研究における問題点や疑問点を指摘して、概念メタファーをめぐる問題について考察した研究である。

概念メタファーが人間の認識や抽象的なことを表現する上で大きな役割を果たしていることは多くの研究が示しているが、時間表現を詳しく見ると空間領域の表現の総てが用いられているわけでは無いという写像の抜けという現象があったり、空間領域における振る舞いとは違った振る舞いを時間領域においてする表現があったりする。これらの現象を説明するために、伊藤氏は「時間は空間である」といった抽象的なレベルではなく、より具体的な状況レベルにおいてそれぞれのメタファーが成立すると考える。

試問においては、筆者が最初に指摘する問題点の総てに対して必ずしも説得的な説明が与えられてはいないのではないかという指摘や、プライマリーメタファーといった伊藤氏の考えに近いGradyの主張などとの関連や違いについての質問、また伊藤氏が提案する鳥瞰図的な時間の見方は結局発話者視点の見方と同じではないのかといった疑問、さらには、先行研究の例の適切さの検討や、先行研究が提案する説明に対して思いきった批判ができていないのではないかという指摘もあった。しかし、全体としては、概念メタファーの有り様やその成立のメカニズムについて、時間表現という個別領域を対象としてではあるが、広く深く考察しており、伊藤氏独自の見解も随所に見られる本論文は、時間領域において用いられるメタファー表現を考える上で大きな貢献をなしたと言える力作である。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分価値のあるものと考えられる。